

輝く郷土へ新たな一歩

市民タイムス創刊50周年企画「未来をひらく」は、第一部を「ふるさと×アップデート」として、10回にわたり時代に対応したふるさとづくりを考えたい。少子高齢化や人口減少といった社会構造の変化に加え、新型コロナウイルスの感染拡大とデジタル化の加速が、地域のありようを大きく変えつつある。転換期にある「ふるさと」の魅力と活力を保つには何が必要なのかまとめてみたい。



ふるさとの宝を次代へ。地域づくりの営みが続く（松本市内田）

未来をひらく

エピローグ

変容する地域社会

外国人を含めて多様な背景を持つ人が暮らす今、地縁血縁を土台にした昔ながらの地域社会と相互扶助の関係には限界が来ている。居住地と勤

務地が異なる会社勤めの人が多い中、地域活動の担い手となるのが物理的に難しく、そもそも地域活動や自治会に必要性を感じにくくなっているのかもしれない。隣近所で助け合って葬儀をする姿も失われて久しい。

地域活動への関心を促し活性化するには、どうしたらいいのか。地域事情に詳しい松本大学の白戸洋教授は「共有する課題、テーマを作り直すこと」を解決の糸口に挙げた。漠然とした「ふるさとづ

くり」ではなく、共通の課題と具体的な目的を設定すれば、参加しやすい。自然災害が多発する中、住民の知恵や力を集めやすいテーマには「防災」が考えられる。

若い世代と一緒に

子供の頃から地域と関わると、大人になった時、地域参加のハードルを下げる可能性

が若者の言葉から見えた。以前は家と家の敷居をまたいで遊んでいる子供の姿が見られ、親同士の交流も生まれていた。しがらみに縛られず地域で活動する若者は住民同士を結び「かすがい」といえる。子供や若者の地域参加は住民間の潤滑剤となり、将来の担い手育成にもつながる。学校の授業や社会教育で行われている子供の地域活動への参加をさらに進めたい。

前例踏襲を越えて

「やり方を見直そうとする」と、大人になった時、地域参加と嫌がられる」。市民タイム

スが連載に当たって実施したアンケートには、慣習にとらわれて硬直した自治会組織や活動への不満が少なからず寄せられた。「自分の任期中は懸案を先送りした方が楽というのがある。前例踏襲の打破はよほどのエネルギーがないと難しい」との声もある。そこで期待されるのが「新しい血」だ。この地に魅了されて移住する人は増えていく。客観的に地域の魅力を知る人が、それをさらに磨こうと取り組む時、柔軟に受け入れて力を合わせたい。外国籍の住民も、地域づくりの貴重な「人材」と捉えたい。「出るくいを打つ」は禁物だ。

地域づくりに「今」を

隣近所の関係は希薄化しているが、防災・防犯上、常日頃から顔が見える関係を築いておくことは大事だろう。互いを知り、過度な個人主義に走らないことが望ましい。インターネットの交流サイトですら不要品をやりとりする取

り組みをきっかけに互いの悩みや課題を知り、実際に集まるようになった女性グループも松本地域に生まれている。隣近所にこだわらず、関係の築き方もいろいろあっている。

「ふるさと」は誰かのものではなく、ここに暮らす一人一人のものだ。自分が参加しやすく、やりやすい方法で、少しずつ手を出す。柔軟に無理せず力を持ち寄ること

で、地域づくりに「今」の息吹を吹き込みたい。それが未来への力につながるはずだ。
(取材班)
.....
「未来をひらく」の第一部「ふるさと×アップデート」はこれで終わります。

《第一部》ふるさと×アップデート

地域づくり本紙の提案

- ① みんなに共通する防災などの課題から取り組もう
- ② 子供と若者を「地域のかすがい」にしよう
- ③ 慣習や「昔はこうだった」にこだわらない
- ④ 職場や学校も地域活動を応援しよう
- ⑤ 自分に合った方法でお互いに「顔の見える関係」を築こう

